



1915 250 Der Niesen

第 22 回

「ニーゼン山」

パウル・クレー

厚紙、紙、水彩 17.6×26cm 1915年
ベルン美術館蔵(スイス)

Kunstmuseum Bern, Hermann und Margrit Rupp-Stiftung c/o DNPartcom

※中学校教科書『美術 2・3』P.6-7に掲載

クレーのニーゼン山に行きましょう

この絵を見た後に「ニーゼン山」とネットで検索してみたいのです。パウル・クレーが描いたこの絵と並んで、スイスのニーゼン山そのものの写真も出てきます。きれいな三角の形をしている大きな山の写真が。

それを見てからクレーの「ニーゼン山」に目を戻すと、絵の中の三角が実際のニーゼン山にそっくりな形で描かれていることがわかります。未広がり山の稜線の角度とか、山が大きすぎて周囲に同じ大きさのものがない感じ。そして空の色になじむような青い色に映っているところ。そんなようなところが似ているのです。クレーの絵の山は線にすると3本くらいで表せそうなほどシンプルに描かれていますが、本当の山の姿に似せて描こうとしたのがわかります。なんでもクレーはスイスの生まれで、若いころにはニーゼン山の近くに滞在する機会も多かったそうです。よく見慣れていたので、「ニーゼン山を描くならこのくらいの角度で、絵の中に入れるならこれくらいの大きさでなければ～」という感覚をもって、シンプルでありつつも似

せて描けたのかもしれませんが。

さて、三角が実際の山に似せて描かれていると思うと、今度は山以外のものも気になってこないでしょうか。山を取り囲むように、きいろ、みどり、ピンク、グレー、いろいろな色の縦に伸びた四角みたいなものが積み上がっています。絵の下側を地面とするならば、足元にある緑のふわふわは草に見えてきます(海苔に見えなくもないけど)。まんなかあたりには黒くて枝分かれした硬い植物のようなものが小さくによきと生えています。北海道に行ったとき、街に生えている木が私の住む東京とはちがうのを見つけて、遠くに来たんだなと実感したことがあります。絵の中のこの見慣れない植物はスイスにしか生えていない何かなのでしょう。色がにぎやかな足元と逆に、絵の上の方は暗く静かな色合いです。空がまだ夜なのかもしれません。もしくは、夜が明けたばかりで足元から世界が照らされていくところなのか。季節はいつでしょう。草木が色づく春なのか、厳しい冬の前に植物が盛り上がりを見せる一瞬の秋なのか。スイスの冬は寒そうですね。

この絵は図形のように描かれながら、奥行きをもち、さまざまに想像の旅行を始めさせるのです。

井上 涼
いのうえりょう

アーティスト。1983年兵庫県生まれ。
2013年より世界の美術を歌とアニメで紹介するNHK Eテレの美術番組「びじゅチューン!」で作詞、作曲、歌、アニメを担当。
毎日小学生新聞でまんが「井上涼の美術でござる」を連載中。